

たまごについて

松田恵美子

壊れた女

子どものころ、母の友人なんかがわたしを見るとよく言った。知らないおばさんにも声をかけられた。親戚や近所のおじさんにも一目置かれていた。

「可愛い子」「お母さん似で、べっぴんさん」

いつしかまじないみたいにそれらの言葉が染み付いて、気がついた時には当たり前になっていた。いつも嬉しそうにしていた母の視線に違和感を感じるようになったのも、もしかするとこの頃だったかもしれない。

「かわいい、たまごみたいだ」

その人に出会った時、これまでと同じように言葉を受け取っていたが、初めて顎のラインを指でなぞられ、頬を撫でられた。

「たまごちゃん」

そう呼ばれるようになって、何度か耳元でささやかれた後、わたしは母になった。思っていたよりずっと早く大人の階段を駆けていったような気がする。

「可愛いわね」お母さん似で、べっぴんさん」

今度はわたしの友人たちが娘を見てこう言った。時々道を歩いていても知らない人が近寄って来て同じことを繰り返した。

娘はわかっているような、わかっていないような顔をしてわたしの方を見てニコリと笑う。

ずっと子どものままだって欲しい母としての願いはどこかへ、娘はすぐに大きくなった。たまごのような輪郭と肌ツヤをそのままに、どんどん綺麗になっていく娘に夫もご満悦のようだった。

娘が大学生になりわたしが四十を過ぎた辺りから、夫はわたしではなく娘のことを「たまごちゃん」と呼ぶようになった。

それから数年して夫は食事中に電話が鳴ると仕事だと言って席を立つようになった。休日は仕事で忙しいからと家にいることが少なくなった。寝ている時も隣にいるのにまるで空気のような扱いを受け、ちょっとした体の触れ合いも次第になくなっていく。二人で最後に出かけたのはいつだろう、悶々とした日々が続くうちに、何かが以前と全く違うというのに、どれも徐々に時間をかけて変化しているからよくわからないのだった。

その日、夫のLINEに知らない女からメッセージが入っているのを見つけた。香水を振りまいて突然「出かけてくる」と言つて家を出た夫を、バッグだけ握りしめそのまま尾行することに決めた。

夫はマンションの玄関を出るとまっすぐに歩いて高田馬場駅の方へ向かっていく。途中、大学生の酔っ払った集団に何度もぶつかりそうになりながら、広くはない歩道を、いつもより若返つて見える夫についていく。

夫は駅の改札を通過せず手前で立ち止まった。遠くから見ると、むかしデートに出かけた頃の夫そのままに見えた。緊張すると落ち着かなくなりすぐに頭をかく癖がある。ポケットに手を入れたり抜いたりした後、何度も体勢を整え直して頭に手をやった。夫が周囲を見渡しているのは誰かに見られていないかを確認しているのだろうか、それとも誰かが来るのを待っているのだろうか。次第に心臓が高鳴り、胸がきつく締め付けられていく。

「お待たせしました、遅くなつてすみません」

甲高い声がわたしの夫に向けられているのがわかった。

人混みに紛れているが、夫が女の顔に手を当てて何か言うのが見える。顎を指先でなぞっているようだ。

二人が改札の中へ入るとき、女がわたしの視線に気づいたのかこちらを向いた。

綺麗なたまご型の顔をしていた。まだ衰えなど知るはずもないゆで卵のような艶やかな肌の若い女。このあたりに住む学生だろうか、あどけなさが残った顔に塗られた、オレンジ色のチークと真っ赤な口紅が印象的だった。

自分の心臓の音がいよいよ大きく聞こえてくる。あまりに激しく上下するので、体全体で自分の臓器を支えていなければならなかった。脈を打ったたび、体が揺れた。どうすればいいのかわからず、よろめきながら駅の外へ出る。

若い女の艶めかしい残像が脳裏から離れなかった。どのようにしてマンションの近くまで戻ってきたのか記憶もない。ただ途中、道で学生にぶつかったとき大声で怒鳴られたような気もする。

「邪魔なんじゃ、ババア」

多分、学生だろう。よろめく足でマンションの玄関にたどり着いた時、若いカップルが抱き合っているのが見えた。

「たまごちゃん」

そう聞こえたような気がした。

男の顔は見えない、女の横顔は美しいたまご型のラインをしていた。ハリがあつて茹でたてのよう、艶やかで白い、月の明かりに照らされるとそれはたちどころに見ている者を魅了した。

「祥子」

声にならない声を出して、見つからないようマンションへ入りながら、私は久しぶりに自分の母親を思い出していた。

エレベーターに乗り込むと大きな鏡が目に入った。

乱れた髪にやつれた顔、ほうれい線が鼻の両脇から下に向かって入りこんでいるのが見えた。体重増加に伴う二重あごに、加齢による目元のちりめんジワ。顔を近づけるほど、顔面の荒さが気になった。

「いやだ」思い切り鏡を叩く。これは本来の自分じゃないんだ。

「助けて」

わたしは一人、恐怖に向かって金切り声をあげていた。

何度もなんども右の拳で鏡を叩いているうちに、自分が自分でなくなっていくような気持ちになった。めまいがする。何かに押し潰されるように胸が苦しくなり、顔を上げると鏡から大きな卵が迫ってくるのが見えた。それはどんどん大きくなり白くてなめらかな肌を見せつけるようにこちらに向かってくる。もうこれ以上ダメだと思ったところで、左手に持っていたバッグを卵に向かって叩きつけた。バッグの中から携帯や化粧道具やらが散乱し、大きな音を立てて床に散らばる。鏡にひびが入ると卵はあつという間にシワだらけのようになって、叩きつける度にどんどんシワが広がっていった。我を忘れて鏡を叩き続けた。

バッグの持ち手のチェーンがガラスに当たり、金具の鈍い音が何度も響く。細かくヒビの入った鏡に映っているのは醜い自分。自分の顔がどんどん崩れていく。

「たまごちゃん」

頭の中で声がこぼれました。

エレベーターの箱が揺れ出し、自分が立てる乱雑な音が壁に反響しはじめる。すぐに警報機がうなり出し、わたしは叫び、もっと強くチェーンで鏡を叩きつけた。エレベーターはこれまでにないくらい激しく揺れる。

そして何も見えなくなった。

割れたハンプティ・ダンプティ

僕がその人と出会ったのは、芝田町にある、通りに面したごく普通の駐車場でのことだった。

デートを下タキャンされたため一人で飲んだ帰り道、駐車場にあった自販機の裏手で胸を丸出しにした女が下半身裸の男と抱き合っているのを見てしまったのが始まりだ。二人の声ができる方へ顔を向けるようにして座っていたのが、その人だった。

その人は、通りと駐車場を隔てた低い塀の上にちょこんと座っていたのだ。突然おとずれた色気の香りと、いつまでも静まらない彼女へのショックと酒のせいと、普段なら素通りするような場面で立ち止まっていた。

「ハロー、おいらハンプティ・ダンプティ。ハンプティって呼ばれてんだ。オタクは？」

「オタクはって言われても」

突然のことに呆然と立ち尽くす僕を放って、ハンプティという男はお構いなしに僕に話しかけてきた。

「ここで何してんの？　こんな裏通りで」

こんな裏通りにいたのはハンプティという男の方だが、僕はとにかく戸惑っていた。

初めて会ったこのずんぐりした男は、人の心に平気で踏み込み、遠慮するとかそんな言葉はまるで存在していないようだった。それなのに、気がつけば僕は先ほど彼女にデートをドタキャンされたため、一人帰り道だということを話してしまっていた。

「冴えない男だね。自販機裏の男を見ろよ、イケイケだぜ」

だからと言ってこの場でセックスがしたいのかと言われるとそうでもなかったのだが、突然、こんな場所であし合うことを止められなくなってしまふ男女を羨ましいと思ったのも事実だった。何だか胸が締め付けられる。

「で、なんでガールフレンドに振られたの？　よかったら聞いてあげようか」

ハンプティはというと、禿げた頭が異常に大きく、まるで頭から手足が生えているようなぼつてり大きな体をした男だった。話をしているかと思ったら急に黙ったり、また始めたり、かすかに聞こえてくる自販機裏の声に耳をすませながら話をしているようなので、会話のリズムがハチャメチャだった。

「振られた理由がわかったら苦労しないですよ。付き合いたてだから張り切って食事に誘ったら、ドタキャンの上に別れたいだって、身に覚えがないんですよ」

「本当に冴えないんだね。まさか、原因はガールフレンド側にあると思ってるの？」

ハンプティは塀から身をのり出すように興味津々に聞いている。あまり乗り出すと頭の重みで落ちてしまいそうだった。

「だって、こんな急なこと、僕が何かしたって言うんですか？　せめて話がしたいと思ってても会うこともできない、電話したって繋がらない、メールの返事だってない。付き合ってたまだ二ヶ月ですよ」

ハンプティは、やれやれ、というように頭を振り黙り込んだ。頭を振ると体全体が揺れた。

「で、オタクの名前は？　名前がないと、人っていうのは存在するに値しないからね」

ハンプティが「で？」と何度も耳を傾けた。耳と言っても暗くてどこに耳がついているのかよくわからなかったけれど。

「広野です」

僕はしぶしぶ自分の名前を伝えた。

「ヒロノさん、ファーストネームも教えてよ。誰もヒロノさんのファーストネームを知ったところで騒ぎ立てやしないよ」

なかなか話が進まないのが嫌なのか、その男は塀から垂らした細い足を苛ただしげに揺らした。足を動かすと体全体が大きく揺れた。

「重雄です」

「ただ今、世界で一ばん不幸なヒロノ・シゲオさん、お気の毒様、そして初めまして」

「ばんと言うところを特に強調して声を張り上げたハンプティは、片方の手で扉を抑え、もう片方の手を僕に差し出した。

「いつだって人の不幸は蜜の味がするものですね」

ハンプティが僕の手を握って大きく上下に振りながら嬉しそうに言った。

このハンプティという不恰好な男、いちいち気に障って仕方がない。それなのに僕は誰かに話を聞いてもらいたい気持ちになっていた。やりきれない、大切にしたいと思っていた彼女があつさり自分を捨てたことが許せないことより、振られた理由を誰かに解いてもらいたいという気持ちになっていたのかもしれない。

「もうちょっと詳しく聞きたいなあ。ほら、何かためになることが言えるかも」

ハンプティの顔にいやらしい笑みが込められているのは分かったが、不思議と人から話を聞き出す方法を心得ているようだった。

気がひけながらも、僕は自分の置かれている状況についてさらに詳しい内容を話すことに決めた。二ヶ月前に付き合い始めたばかりだったこと、友達に紹介されて一目惚れしたこと、最近まで仲良く過ごしていたこと、そして急に彼女の態度が変わったこと。僕に訪れた悲劇の限りをハンプティに説明した。

ハンプティは話を聞いているのかいないのか、僕が不安な視線を向けると「続けて」とでもいうようにならずいた。

「確かに、初めの頃は随分彼女に構ってご馳走もたくさんしましたが、仕事が忙しくて連絡が遅くなったり、おろそかにしたこともありすよ。だけど手を繋ごうとしたら恥ずかしがるんで我慢しましたし、代わりにバッグを持ってあげましたよ、毎回じゃないけど。腰を触ったら笑って逃げるから追いかけたり、イチャイチャもしたり、抱きついた時はいい匂いがしたなあ」

「見た目？ 顔も目も丸いショートカットの可愛い子でしたよ。背が低くてぼっちゃりした感じが僕の好みでした。そうそう、年齢は五つ下です。まだ学生で。何でもしてあげたいと思っていたのに」

「僕の家？ 来たことないですよ。彼女、住んでるところが遠いんです。なかなか時間が取れなくて、会っている時だって終電がなくなるからって早く帰るし」

話をしている間、聞いているのかいないのかハンプティは時々、ちよつとした質問を挟むくらいでほとんど黙っていた。僕が話を止めると会話に空間ができてしまい、いよいよ遠慮がなくなってきた自販機裏の声が気になるほどだ。

「聞いてます？」

反応の鈍いハンプティに不信感を持ち始める。

「つまり、僕に落ち度があったのかってことですよ」

「もうすぐ夏だから旅行へ行くつもりだったんです。車だって持ってるし、宿もいいところを探していたのに。彼女は目をウルウルさせていましたよ。僕が全部払ってあげるって言ったなら」

何もかもが完璧であるはずだったのだ。そうでないといけなかったのに。

「あのお、少しでもアドバイスとかないんですか？」

話をしている間、ハンプティは自分の意志というものをまだただの一つも述べていなかった。

「何か一つでも意見くらいあるんじゃないですか？」

何だか話して損をしたような気持ちになった。

「ここらでたまご入りのサンドイッチが食べたいね」

しばらくしてハンプティが初めて視線をまっすぐ僕に向けて口を開いた。

「やっぱりサンドイッチはたまごじゃないと」

僕があっけにとられて黙っているのをよそに、ハンプティはまるでこれまでずっとずーっとパンに何かを挟んで食べる食べ物について議論をしていたみたいな口調で言った。

「からかわないでくださいよ」

思わず大きな声が出た。

「アップルサイダーも頼むよ」

ハンプティは自分の言っていることがおかしいなんて多分考えたことすらないだろう。

「僕は真剣なんです。元カノのことで」

声を張り上げるとあたりが急にしんとした。

「だってさ、ヒロノ・シゲオさん、もう破局の原因はわかってるんですよ」

ハンプティがまた笑ったように見えた。

「だから一緒に乾杯でも」

「僕には彼女が全くわからないし、分かってたいんですよ。あなたがいい助言ができるかもしれないっていうから」

思った以上に大きな声が出ていた。

「おいらは二人のことがもちろんわかったよ」

ハンプティが右手を口に当てて笑っていた。塀から片手を離すと本当に落ちてしまいそうだった。

「より返すいい方法があるんですか？」

今度は僕が身を乗り出していた。

「ノー」

ハンプティは、今度は腹を抱えて笑っている。両手を塀から離すと本当に落っこちてしまいそうだ。

「あなたに話をしたのは時間の無駄でした、本当に」

呆れて声が小さくなった。それでもハンプティはまだ笑っていた。

「これなら真っ直ぐ家に帰ればよかった」

自分でもなぜそうしなかったのか、友達を誘って話を聞いてもらうことだってできたはずなのに。徐々にハンプティに対する自分の態度が地団駄を踏む子供のように思えてくると、早くここから立ち去りたく

なった。

「ヒロノ・シゲオさん、まだわかんない？」

ハンプティは僕をじっと見つめて言った。

「覆水盆に返らずだよ」

腑に落ちない顔をしている僕をのろまとも思ったようだ。ハンプティは頭を下に向けて笑いが止まらないみたいだった。

「シゲオさん、若かってバカでサイコーだね」

あんまり笑うものだから、ハンプティはどうとう塀から落っこちてしまった。

僕が驚いて叫び声をあげると同時に、自販機裏から女と男の歓喜の声が夜の裏地に響き渡った。

一瞬にして世界が静まり返った。最初から何もなかったみたいに。

「この辺りで最も不幸なヒロノ・シゲオさん。でもまた次に活かすといいい。自販機裏でやってくれるよ
うな可愛いガールフレンドができるといいね」

地面に倒れたハンプティは割れて真っ二つになっていた。

白い身だけが見えていて、僕には到底、どうしてあげればいいかなんてわかるはずがなかった。